

文部科学省登山研修所長殿

要 望 書

この度、「登山研修所の大学山岳部リーダー冬山研修会に係わる安全検討会」より『報告書』が提出されました。同『報告書』は、平成12年3月に大日岳山頂付近で起きた雪庇崩落死亡事故の反省をふまえ、安全な研修再開を目指して、安全確保対策等の指針を示したものとして、検討委員各位のご努力に敬意を表するものであります。

本省の話によりますと、シラバスの作成、研修実施体制の再構築等すべてを貴研修所に一任したとのことであり、私共は事故の再発防止が「この指針をいかに具体化するのか、いかに誠実に注意深く実施するか」につきると確信し、貴研修所が、誠意を持って最善の成果を生みだしてくださる事を期待しております。

つきましては、貴研修所が下記の点を考慮に入れ、研修再開にあたっての作業をすすめると共に、指導にあたる講師の方々の肝に銘じて頂きたい、強く要望いたします。

記

1. 大日岳遭難事故訴訟の判決では、講師らの過失が認定されたが、「どのように判断を誤ったのか」は今も明らかにされていない。事故の教訓を生かし、再発を防ぐためには研修主催者と講師が過ちを認識し、反省してそれを公表する必要がある。
2. 尼崎のJR脱線事故、明石海岸の砂浜陥没事故、明石歩道橋事故、エキスポランドジェットコースター事故などの原因は、いずれも慢心、油断、不注意が根底にあることが指摘されており、大日岳遭難事故もこうした気の緩み、油断があったことを率直に認め、常に注意を喚起すること。
3. 『報告書』では、「過去の登山や事故に関する情報を文書化しておく」(p.6)、「事故の事例のみならず、いわゆる「ハッ」とした、あるいは「ヒヤリ」とした体験についてもこれらの情報を収集・整理・蓄積し、その原因を検証し、対策を立てる」(p.7)と提案されている。平成12年の大日岳遭難事故、昭和64年の長野県主催の研修中に起きた五竜遠見雪崩事故など、参考資料としてシラバスに掲載すること。
4. 上記の1および3を実地に生かすためには、当時の研修に参加した講師方が事故の原因及び反省すべき点が何であると考えておられるのか、その証言が不可欠である。すでに裁判は終結しており、講師は勇気を持って、正直な意見を述べ、生きた教訓を残して頂きたい。

2008年8月19日

内藤 悟 万佐代
溝上 不二男 洋子